

ペンフレンド（二） 最初の手紙

中村アキヤ

それから十日後一通の封書があきらの許に届いた。

「蔵王のあの刺すような冷たい風（貴方には特に身に沁みたでしょう）を思うと桜もチラホラ咲き始めた東京の暖かさは全く夢のようです。初めはどうなるかと案じていたスキーも名コーチのおかげで何とか見当だけはつき、どうやらスキー熱にとりつかれそうです。なんてこちらはいい気になっていますが、貴方達のせつかくのスキーを私達足手まといの為に台無しにしてしまったのではないかと、ちよつと（ほんのちよつと）心配です。

みんなの間で小さくなっていた？ 緊張が解けて、帰ってから毎日ウツラウツラと眠ってばかり居ます。気がついてみたら足じゅう痣だらけで今更ながら自分の凄まじい転び振りを思い出しておかしいやら、ちよつと可哀想やら…。

スキーもさることながら宿に帰ってからみんなで遊んだ楽しさも忘れられません。ジנגイス汗鍋を囲んで飲んだビールの苦かったことも、あのダンスも…。本当に楽しい四日間でした。

友達が遊びに来たら私の名スキーヤー振りを自慢してやろうと手ぐすね引いて待っています、今のところ恐れをなしたのか一向に現れずいささか拍子抜けの形です。（どうぞそのおつもりで私のスキーの実力に着いてはお口を慎んでくださいね）

本当に有り難うございました。ご心配をおかけした足も、もうなんともありません。もしもこれにお懲りにならなかつたらこの次も連れて行ってくださいね。写真ができましたが、お会いする機会がないようでしたらお送りします。ごきげんよう。

中山 あきら様

青木めぐみ

四月四日」

あきらは女の子からこんな手紙を貰ったのは生まれて初めてだった。これまで女性からの手紙と言えばクラスメートからの年賀状位のもので、封書の手紙を受け取った経験は皆無であった。

帰ってから少し間があったけれど律儀に礼状を書くめぐみが好ましく、彼女

が喜んでくれたのを知って嬉しかったので、早速返事を出したが、これがきっかけで今後お互いに手紙を何十通も交換することになるとは、めぐみもあきらま思ってもいなかった。

「拝復、お手紙嬉しく拝見しました、なんて手紙を出す方も返事を書く方もだいぶ遅蒔きの話ですね。前野の言葉を借りれば北海道以来ずいぶん長い潜伏期間を経て、なんとも奇しきご縁でスキーにお伴する榮譽に浴したのですが、我々グループはみんなわがままで不調法の故、折角スキーに来て戴いても面白くなかったのではないかと、些か責任を感じ、帰宅したその夜は輾転反側として眠れませんでした（次の日に寝坊したけど）。だからお世辞にしても楽しかったと云って戴いて安堵の胸をなで下ろしたところです。

それにしても急坂を前に寒風の中で立ち往生し、互いに見合わせた情けない顔を思うとき、また無けなしの勇気を奮い起こした末のめぐみ嬢のまっ逆さまズリ落ちの図などの雪中地獄絵巻を思い出すと、ニヤリとするのを禁じえません。満身瘡痍になりながらも敢然として滑っては転ぶ、貴女の素晴らしい闘志と毎日の旺盛な食欲にはただ頭の下がる思いであります。

いくら音楽部に籍がある身とはいえ、あの大きな笑い声で隣室のオバさんを二晩も睡眠不足に追いやったことは、悪意のなかつた事とはいえ気の毒でした。それはとにかく、いつか新宿で皆さんとお会いしてすぐにスキーに誘い、帰るなり今度はハイキングに誘うなどという余りの厚かましさに我ながら呆れて居る次第ですがご迷惑でなかつたらこれからもどうかよろしくお願いいたします。

新学期が始まるとそちらも学業に御忙しいでしょうが、たまにはダンスなどもお勉強なさって、そのおさらいの場合はどうぞ御誘い下さい。（ちよつと図々しいかな？）十日にまたお会いするのに手紙を書くななんて間の抜けた話ですが返事を出すのは礼儀だですから、字が下手で恥ずかしいのですが拙文を綴った次第です。

PS こちらの写真は今日（七日）焼く予定です。十日に持って行きます。十日が雨の場合は郵送いたします。

四月十日早朝、小田急電鉄の新宿駅に一行は集結した。男性軍は蔵王に行った前野、あきら、提案しながら蔵王には行けなかった中田、そして急に都合で参加できなくなった石川にかわって森井利夫がメンバーに加わった。森井は北海道旅行にも蔵王スキーにも参加しなかったが、やはり戸山高校の時のクラスメイトで一浪して東大の工学部に進んでいた。兄弟にはお姉さんしかいないせい或少し恥ずかしがり屋で、身体もどちらかといえば小柄なほうだった。とにかく視力が強く遠くの物件を見分ける能力は抜群で、山に登って道に迷った時など道標を見つけるのが上手かった。

森井には面白い逸話があった。戸山高校に隣接してのちに重要文化財となる立派な門の女子学習院があり、当時は清宮殿下が通学されていた。通学の自動車が門に入る際たままたま自動車をのぞき込んだ森井と宮様の目が合った。その時宮様は森井のほうをみてニッコリ笑ったというのである。

「嘘つけ！ 宮様はそんなに愛想が良い訳はない。お前の顔がおかしくて笑ったんだよ」と周りの皆がいうのに森井はいつまでもそのことを誇りにしているのである。

またある時その校門から校舎までの桜並木に沿って女子学生がずらりと整列したことがあった。戸山高の生徒は何があるのかと始業のベルが鳴ったのも忘れて、二階の窓から学習院のほうを見ていた。

「どうやら今日は学習院でPTAがあるらしい。それで清宮のお母さんも来るらしい」

「馬鹿、皇后陛下のことそんなふう呼んでいいのかよ」

生徒たちがのんきにこんな話をしていると、体育の教師が凄い形相で階段を駆け上がってくるや、窓の外を夢中で見ている生徒の頭をコッソ、コッソ、コッソと端から順に殴りはじめた。廊下から外を見ていた殆どの生徒がコッソを喰ったが、森井だけは体育の教師がくるのを目敏く見つけ、自分だけ教室に戻ったので被害にあわなかったという。

丹沢の大山へハイキングするといって集まった女性軍は仰木、久慈、西田それ

に青木めぐみだった。昨夜らしい雨は上がったが雲は低く垂れ下がり、朝から氣勢は上がらなかった。バスを降りて登りだした大山神社への山道はぬかるみ、滑り易かった。山頂に着いても辺りは霧で眺望は楽しめず、四月とはいえ陽の当たらない山の上は肌寒く雨に濡れた大杉がそよもしないで立っていた。

皆は手分けをしてすき焼きの準備を始める。女性軍はビニールのシートを広げ紙コップや皿をリュックから取り出し、肉や野菜それに砂糖と醤油などのスキヤキの材料を取り揃えた。男性軍は焚火を燃やすべく大きな石を並べて即席の竈をつくり、薪を採取すべく藪に入ったりしたが、ここで彼らが発見したことは、大山神社は実によく整備されているという事実だった。

見事なまでに清掃された境内には焚火の材料になる可燃物は、神社の建物の柱ぐらいしかなく、彼らが期待していたような枯れた小枝とか乾いた落ち葉とか、薪に好適な古い材木の切れ端などは全く見あたらなかった。神社を少し降りた参道も両側は笹藪で、植物といえれば密生している活きた笹しかなく、その笹も昨夜からの雨で充分過ぎるほど湿り、とても燃料にはなりそうもなかった。

「とにかく燃えそうなものは湿ったままでもいいからここに集めよう」

家から特大の鍋を持参した中田が真面目な顔でいった。

「俺は携帯燃料を二缶持って来た。新聞紙でも雑誌でも燃え易いものを出してくれ。真ん中で火を焚いてその周りに湿ったものを置いておけば自然に乾くだろう」

「さあ女性の皆さんはスキヤキの材料を鍋に入れて下さい」と前野が男らしく晴れやかに指示した。

だが、いくら待っても鍋は熱くならなかった。固形アルコールをベースとした携帯燃料は火種としては有効だったが、野菜と肉を満載した大鍋を加熱するほどの火力はなかった。まして新聞紙などはほんの一瞬だけ景気よく炎を見せたが、あつという間に黒い灰となって空中に飛び去ってしまった。

苦勞して集めた濡れた落ち葉や枯れた小枝は、貧弱な火力をあざ笑うかのよう、目に沁みるけむたい白い煙を出すだけで、熱源というよりは熱の吸収体でしかなかった。

早起きしたので皆空腹だった。この薄ら寒い中をここまで登ってきたのは暖かいスキヤキをお腹いっぱい食べられると期待していたのだ。

「大丈夫？ しつかり火を起こして！」などと声援を送っていたためぐみも容易ならぬ事態を悟って、これ以上はかえって皮肉に聞こえるからと応援を中止した。あとは黙って事態の成りゆきを見つめる以外に方法はなかった。

中田と前野の奮闘ぶりは涙ぐましいものであった。煙に巻かれて涙を流しながら彼らは手を丸めて火吹き竹のかわりにして薪に息を吹き込み、なんとか景気よく火を燃やそうと努力していた。一方森井とあきは遠方まで出張して、乾いた燃料を調達しようとしていた。しかし携帯燃料の固形アルコールが燃焼し尽くした時点で全ての努力は報われずに終わった。

半煮えの白菜はまだしも固い葱は食べられなかった。豆腐は芯がまだ冷たく、生煮えの肉はいくら噛んでも咀嚼できず、飲み下すには勇気が要った。あきは西田がたまらず口から肉を出してそつとチリ紙に包んだところを目撃した。

主食代わりに持ってきたパンだけがまともに食べられるものであった。

「よし、こうなれば早めにここを引き上げて駅前でラーメンでも食べることにしよう」

いざ撤収となって困ったのは、大鍋一杯の生煮えのスキヤキを捨てるところも、捨てた後の鍋を洗うところも無かったことである。

全員無口で下山路を急いだ。滑り易い坂道ではみんな代わるがわる尻餅を突いた。中田が切り株に蹴躓いてもんどり打って倒れた。大鍋をはじめ彼の荷物をあきらが無理して担いでやった。

それでも駅前の食堂でラーメンを食べると皆元気を取り戻した。何があっても若い者同士でハイキングに来るなんていうことはお互いに滅多にない機会だし、自分達はその機会に恵まれたと思うだけでも彼らは満足したのだ。春休みは間もなくおわり、めぐみ達は明日から新学期が始まるのだ。

「拝啓、先日は雨にも降られずといつて晴もしなかったのですが、快適な？ ハイキングを楽しみました。翌日学校にいかねければならなかった貴女方の心中を察する度に深い同情の涙に頬を濡らしております。さぞ、痛む足腰を擦すりながら恨めしい顔をして校門をくぐった事でしょう。当方も待ちかねた新学期が始まりましたが土曜日以外は毎日五時まで実験があり、はやくも夏休み

を待ちかねています。

さて、用件というのは先日十日に帰宅を急ぐ余り、誰かさんのボールだかバットだか正式になんと言うのかわかりませんが、肉だか豆腐だかを入れてきた容器を、小生のザックに入れたまま家まで持って帰ってきてしまったのです。

それを見る度に生の牛肉がまだ胃の中に残っているような気がして、早くお返ししたいのですが誰のものかも解らず一人で悩んでおります。といって小金井の貴女のお宅まで持って行くだけの親切心はさらさらないし、十七日に日比谷の音楽会に行かれるのでしたらその時持参してもよろしいですか？ もっと早くご入用なら新宿駅に持って行ってもよいのですが、貧乏暇なしのバイト学生には夜六時前はちよつと都合がつきませんので誠に恐れ入りますが善処願います。要領を得ない手紙で済みません。さよなら。

青木めぐみ様

中山 あきら

四月十三日

「お手紙をわざわざありがとうございます。あの容器は仰木さんのものです。彼女とも時間がかけ違ってゆっくりお話する時間ありませんでしたが、別に何とも言っていないところを見るとそんなにお急ぎではなさそうです。やはり十七日に持ってきて戴くのが一番よいでしょうね。お互いに音楽会に妙なお荷物であり有り難くはありませんが……。私の席は一階の真ん中辺り（P列の二十九番）ですから、お休み時間に一階のロビーにいらして下さいませんか？

黒川さんもご一緒ですからご期待下さい。

話が前後しましたが先日はいろいろお世話様でした。肩がさぞかし痛んだでしょうね？ いいところを見せようとあまり無理しなくても良かったのに。翌日は我々一同早く起きるのが辛かったけれど到って元気に登校しました。一日床を離れられなかった誰かさんとは違いますよ。貴方のほうはもう学校で絞られているようだけれどこちらは十八日までまたお休みです。（ご愁傷様）

始業式の日には調査書とやらいうものを書かされましたが、そこに得意なスポーツという項目がありました。登山と書くこうと思いましたがちよつと気が引けたので止しました。誰かさんから横槍が入るとうるさいので……。私は勿論スキーと書きました！（苦笑しているお顔が目に見えるようです）冗談はさておき十七日には例のものご面倒でもお持ちください。お風邪を召さぬよう、しっかりお勉

強のほどを。ごきげんよう。

中山 あきら様

青木 めぐみ

四月十五日」

あきらはめぐみのレスポンスが早いので心地良かった。自分の二人の妹達のふだんの行動から考えてみると、女性は口は達者だが、いざ行動となると途端に愚図になると思いついていたのだ。めぐみの文章が少しお姉さんぶっているところも又いいな、と長男のあきらはそんな感じもしたのだった。

四月十七日のN響にあきらは金属製のボールを風呂敷にくるんで日比谷に持参した。当時の日比谷公会堂は周囲のビルと比べて際立って大きく、二階の入り口への階段は広く長く感じた。あきらにとつて始めてのN響コンサートだった。あきらの席は二階のうしろの方だったが、自分の席がわかるとあきらはすぐめぐみの席を目で探した。戸山高校の仲間を出し抜いて、自分一人でめぐみに会えるのが嬉しかったが、同時に自分の意図がめぐみに見抜かれたようで恥ずかしかった。

コンサートの休憩時間に会場のロビーでめぐみと黒川に会い、終了後夕食を一緒にすることにした。あきらはこの周辺のどこで食事をすればいいのか、何を食べればいいのか皆目見当がつかなかった。

めぐみと黒川はもの慣れた調子であきらを番長小学校の近くの「揚子江」という中華料理屋に案内した。

「中山さん、焼きそばでいいでしょ？ 固いの？それとも軟らかいの？」とめぐみに聞かれて、あきらは固い焼きそばと軟らかい焼きそばがあることを初めて知った。

食事をしながら黒川は今度の連休には自分は名古屋の実家に帰ること、東京組はあきらの仲間とのハイキングがとても楽しかったようなので、又どこかに連れ出してやって欲しいと話した。勘定の際あきらは男の自分が全部払うべきだと思っただがメニューも見ずに注文したので、三人分の値段がわからずもお金が足りなかったら恥をかくな、と心配した。

「今日は初めてだから私をご馳走するわ」とめぐみが全部払ってくれた。あきらはどうして女の子はみんな金持ちなのかと不思議に思った。

数日後、あきらの緊急要請に従って再度前野の家に仲間が集結した。五月の

連休に彼女らを誘おうというのである。積極的に誘えばまず断られることはなさそうだが、とのあきらの観測結果である。

「彼女らも相手がいらないんだよ。俺らもう少し強気で押していいいんじやないか？」

中田がみんなをけしかけた。彼は今度の連休には上智大の後輩の女の子となにか計画があるらしく、仲間の行事には不参加を表明していた。だからよけい無責任に積極策を提案した。

「どこかの高原を一緒に散歩しませんか、と誘うのがいいよ。女は高原とか散策とかの言葉に弱いんだよ」

女性の扱いの点では中田に一目置いているみんなは、一も二もなくそのキャッチフレーズの採用に賛同した。いろいろ協議の結果、菅平への一泊旅行をおこなうことで衆議一決した。そこで彼らは勧誘の手紙の文章を共同で練る事にした。前野が書記になりみんなが口々に提起する文章を編集した。

「よし、出来上がった文章を読むぞ。えーと、麗しい津田塾の皆様、青葉の季節を迎えいかにお過ごしでいらつしやいませうか？ どうした天の引き合わせか私共と北海道でお会いして以来、幾たびかの逢う瀬を許して戴きましたが、私どもはいつも天にも登る心地がしております。この度の五月の連休には是非皆様と手に手を取って鈴蘭匂う高原の散策などいたしたく、伏してご同行をお願いいたします。これでどうだ？」

「鈴蘭匂うというよりは鈴蘭香るのほうがいいよ。でもこんなキザな手紙みっともないよ。それに誰が誰宛に出すんだよ？」とあきらが質問した。

森井がすぐに答えた。

「前野が一番字が上手いから発信人になってもらって、向こうのリーダー格の黒川嬢宛がいいんじゃないの？」

「森井、お前は黒川嬢に一度も会っていないのに、よくそんなこと言えるな？それに俺はこんな手紙の発信人は嫌だ。俺が字が一番上手いことは認めるけれど」と前野。

あきらが早速実行案を提唱した。

「用件は前野から仰木さんに電話して貰おう。でも折角皆で考えたこの手紙を、このまま捨てるにはもったいないな。そうだ前野、君が買ったばかりのテープ

レコーダーに吹き込んでみんなで聴いてみよう」

「なんだ、そんなもの買ったのか。ちよつと見せろよ」

「どうせ吹き込むなら、バックミュージックも考えよう」

「いつそのこと吹き込んだテープを仰木君に電話で聴かせたら？」

当時庶民にはちよつと手のでない、市場に出たばかりのソニーのテープレコーダーは厚手の碁盤位の大きさと重さがあつた。カセットなどという洒落た装置はなく、テープは大きなリールに巻かれたものであつた。連中は代わる代わるマイクを持ち、造り声を使ってキザな手紙を読み、ロマンティックな音楽と共に自分達の声をこの最新式の器械に録音し、再生しては笑い転げるのだった。

一行が上野発の夜行列車にゆられて、早朝信越線の上田駅に着いた時は既に菅平行きのバスは出発した後だった。雲が低く垂れ込めて今にも降り出しそうな、人気のない駅前で次のバスが来るまでに一時間半も待つたのだった。

菅平のバス停から二十分程登つた山の斜面に、へばりつくように建っている望岳荘という宿屋についたのは、昼近くになつていた。

当時の菅平はなだらかな起伏の丘が連続し、冬には恰好のスキー場となるのだが、雪が消えるとなんの特徴もない牧場が果てしなく広がるばかり。

僅かに山頂を雨雲に覆われた根子岳のみが、締まりの無い風景の唯一のアクセントであつた。

望岳荘は昔の開拓農民が冬季にスキー宿に鞍替えしたのが始めらしく、旅館というよりは山小屋に近かつた。

玄関口のガタガタのガラス戸を開けると卓球台の置いてある土間があり、煮しめたようなスリッパにはきかえて案内された長い廊下は、長年水拭きしたために浮きでた木目の部分が黒くひかり、戦前の小学校の木造校舎を思わせた。

旅館の周囲は熊笹が密集し、少しでも道から外れると笹の葉の水滴ですぐにずぶ濡れになることうけあいであつた。持参した弁当を片付けるとみんな雨具に身を固めて近くの展望台に行くことになつた。

「この天気では展望台に行っても何も見えないでしょう？ 私はそれよりも鈴蘭がはやく見たいなあ」とめぐみが言った。

「鈴蘭はこんな所にきたって見られないよ。ここで見られるのはキスゲだけけど、七月にならないと花は咲かないもんなあ」と宿屋のおばさんが答えた。

まだ肌寒い五月に、山の雨について東京から来た若い衆は何を目的にきたのかと問いたげであった。ピンポンに多少自信があったあきらは、夕食後の団らんの際みんなを誘ってみた。が、菅平まできてピンポンなどやりたくないという意見が圧倒的だった。わずかにめぐみだけが、「私がお相手をしてあげる」というので二人で薄暗い土間で靴にはきかえて古いラケットを手にした。

「変てこな持ち方をするのね？」とめぐみに言われてあきらは戸惑った。

あきらはピンポンを教えてくれた先輩と同じシェークハンドグリップなのに、対し、めぐみは日本人に多いペンホルダーグリップだった。しばらく打ち合いをした後カウントをとってゲームをすることになった。

めぐみのピンポンは攻撃型で、フォアハンドで高めの球を強打するのが得意だった。あきらの戦法はグリップの性質上球をカットして打ち、相手のバックを攻めるところにあった。ところがめぐみはカットされた球を打つとみんなネットする上にバックハンドが弱くたちまち敗色濃厚となった。一ゲームを先取されるめぐみは憤然としてこう言った。

「中山さん、男らしく堂々とフォアハンドで打ち合ったらどうなの？ それに変なサーブとカット球は禁止よ」

得意のくせ球を封じられてあきらは次の二ゲームを連続して落とし、結局二対一でめぐみの勝利するところとなった。

「なんだ、案外だらしのないのね、もう一ゲームやる？」と挑発されても、あきらはウンとは言えなかった。内心、めぐみは顔が可愛い割に身勝手な女だなと思った。

翌日は朝から土砂降りの雨でヒョットするとバスが運休するかもしれないというので、午前中のバスで下山しそのまま帰京した。悪天候とルーズな計画で所期の目的は達せられなかったが、一晩泊まりで若い男女が語り明かすことが出来ただけで、みんな満足したのだった。

「拝啓、先日はいろいろお世話になり本当にありがとうございます。お陰様で大変愉快的な旅行ができて感謝しております。小生が冒頭からこんな謙虚な手

紙を書くのは下心あつての仕業だと賢明な貴女にはもうお分かりでしょうね。

マアとにかく先をお読み下さい。実を申せばあの連休の旅行は期待したほど面白くなかったというのが本音です。上野駅で前野と延々四時間も座席確保のため並んだこととか、小生ほどの名人がどうした風の吹き回しか、ピンポンのピの字も知らないような誰かさんに敗北を喫するとか、バスに乗り遅れて表面上はただニヤニヤと下らない馬鹿話を続けながらも悲しい想いをジツト胸に秘めていたとか、あれこれ考えるとなんて哀れな思い出であろうかと、今になって悲憤慷慨するのみです。

高原のブラブラ歩きなんて貴女達を誘うときは我ながら上手いキャッチフレーズを考えだしたものだと思われ一方、マンマとその言葉に引かかった貴女達には大変気の毒をしたと思っております。

ところで同封しました五月祭のプログラム、全くチャチなもので恥ずかしいのですが我々一人当たり十枚強制的に割り当てられて処置に窮しているところです。苦しいときの神頼み(だいぶもちあげましたよ)、窮余の一策として貴女の許にその一部を強制送還することにしました。

面白いからぜひいらっしやいと、普段から良心的な小生のこととてちよつと言えませんが、もし、万が一お暇でしたら、勿論代金は結構ですから、いらして下さい。

時間と場所さえ連絡して頂けたら何処へでもお迎えに馳せ参じますし、そうでなくても当日は第二食堂前の理学部化学科の部屋で奮闘している筈ですから、ちよつとお立ち寄り頂ければ幸いです。今回はお詫びとお願いのため出来るだけ謙虚な丁寧文を書いた積もりですが、いつもこう謙虚であると思ふのは間違いですよ。

P S 五月十九日(月)のN響はどうやら行けそうです。ではお元気で。

青木 めぐみ様

あきら拝 五月十三日

「お手紙と五月祭のプログラムを有り難う。なんだかだいぶ言い訳したり、心にもないことを殊勝らしく書かれておられるようですね。翌日早速みんなに貴方の意向を伝えましたが、みんなそれぞれに忙しくて揃って伺えるかどうかは疑問です。とにかくプログラムはみんなに渡しておきました。

貴方の涙ぐましい努力に免じて仰木さんと私は日曜日の予定を犠牲にしてお伺いすることにしました。感謝するのですよ。(なんてちよつとばかり好い気持ちです。でもプログラムをただで取り上げられたり、威張られたりでは立つ瀬がありませんね)

大体記念祭というようなものはどれも決まりきっていますから期待はして居ませんが(ごめんなさい)今度は貴方の奮闘ぶりが見られるだけでも楽しい気がします。日曜日には二時頃伺いますが、とにかく化学科の部屋に行ってみます。

さて旅行のほうはいろいろお世話になりました。男性軍だけで三日間をフルに使い、高い山に行った方が楽しかったのではなくて? そんなことを考えると私達のために折角の連休を台無しにしたのではないかと心配です。私達は(貴方達の犠牲的精神のおかげで? ええ解っていますよ)結構たのしかったのですからその点はご安心ください。でもスキーの時ほど全てが順調に行かなかったことはたしかですね、そのせいでしょうかスキーの時の思い出のほうが印象深く、写真を引つ張り出してはあの時の事柄を懐かしんでいます。では五月祭しつかり奮闘してください。ごきげんよう。

中山 あきら様

青木 めぐみ 五月十五日

抜けるように晴れ上がった東大のキャンパスは何時になく華やいでいた。ようやく芽吹いた銀杏の並木道には華やかな色彩が溢れ、眼鏡をかけた学究肌の人物がうつむき加減に歩いているいつもの峻厳な風景からは想像できない、明るい雰囲気に満ち溢れていた。

大学一、二年生の主催する駒場祭はどちらかと言うと反政府的なスローガンを書き殴ったビラに溢れていたが、本郷の五月祭はそうしたものは皆無とは言えないまでも、もう少し大人の雰囲気を漂わせていた。

毎年同じ様な趣向であったが、学生は毎年同じではないし、五月祭を見に来る人達は学生達の親戚だったり友人、恋人であったり、いずれもこの機会に東大とはどんなところかちよつと見てやろうと、多少の好奇心と共に訪れるのだった。

東大の理学部化学教室はお茶の水駅からのスクールバスの終点に面した古い煉瓦建ての建物だった。バスストップの反対側はこれまた煉瓦造りの学生食堂

で、そこはよく土曜日にダンスパーティーが開催された。土曜日に限って学生たちは遅くまで実験を続け、夜の七時頃になってそそくさとダンス会場に急ぐのだった。化学教室の東側は道路を隔てて御殿山グラウンドがあり、天気の良い日には、あきらたち学生は実験室を抜け出しては草野球に励んだものだった。

五月祭の日には、あきららは生化学専攻の大学院生の手伝いで、ある種のステロイド化合物が、特殊な波長の光に反応して蛍光を発する現象を説明することになった。

狭い暗室の中で見物の人が溜まった頃を見計らって、先輩から口写しで教わった内容を定期的に繰り返すのだ。

説明の最中に肘をつつく人がいるので振り向いたところ、めぐみと仰木あさが会釈するのが判った。説明をそうそうに切り上げあきらはそのまま彼女らとエスケープしてしまった。

「私たち、ちゃんと五月祭にきたでしょう？ その代わりといつては何だけど津田の合唱祭に来ていただけないかしら？」

こうちゃっかりと言われるとすぐに断るわけにもいかず、あきらは口ごもるばかりであった。翌々日あきらはめぐみからの手紙を受けとった。

「五月祭の時はお疲れさま。我々のような冷やかかし半分の見物人の前で、平気で説明してのけた心臓にはいささか驚いています。でもまあよくできました。

さて、六月二日の私どもの合唱祭ですが貴方はどうもお気が進まないようでしたけれど、前野さんが来てくださるそうですからあなたもいらっしゃいませんか？

とりあえず切符をお入れしておきます。これは決して強制ではありませんのでご都合が悪ければ勿論無駄にして下さって結構です。妹さんにも差し上げてください。

当日私はみんなの後ろにもぐっていますからとてもお分かりにはならないと思いますが、あの合唱の中に私の声も混じっていることはお忘れなく。勿論専門のエキストラが沢山入りますのでいらぬ心配はご無用です。もしいらして下さいならば終了後一階のロビーに居て下さい。勿体振らずになる丈来てくれること。ではごきげんよう。

あきららは、めぐみが自分だけではなく前野も誘ったことを知り、なんとなく不愉快であった。

合唱祭のある六月二日は梅雨入りを前にした、蒸し暑い鬱陶しい土曜日だった。暑さに身体が慣れきっていないため終日気だるい気分ですごしたあきららは、躊躇したのち神田一橋の如水会館に出かけた。席につくなりあきららは舞台に整列している合唱団の中から白い丸顔のめぐみの姿を捜し求めた。

手紙の通りめぐみはソプラノの一番後列で唄っていた。前列には黒川が首を振り振り唄っているのが見えた。女性だけのコーラスが続いたあと、フィナーレの一橋大音楽部との混成合唱の曲目は「流浪の民」で、男性のパートだけがやかに元気良く聞こえた。

終了後、前野、黒川、めぐみとロビーで落ち合った。森井まで動員されていたことを知ってあきららはびっくりした。夕食まではまだ時間があるので近くの喫茶店でお茶とケーキだけで別れた。

別れ際にあきららは皆の前で強引にめぐみをヨット部主催のダンスパーティーに誘った。当時の学生にとって一枚三百円のパーティー券は破格の値段だった。

ヨット部の佐々木が十枚のチケットを先輩から強制的に割り当てられ、化学科の実験室で仲間懇願していた。

「割当を達成しないと、俺は今度のインター杯の試合に出して貰えないんだ。たのむよ」

分厚い胸板と真っ黒な顔の佐々木に頼まれると少し高いけれど二枚位はなんとか買ってやろうとあきららは思ったのだ。

めぐみは自分だけ誘われたので当惑していた。あきららはすでに購入した二枚の切符をかざし、めぐみが行かないなら無駄になるので、妹にくれてやるしか仕様が無いと強弁した。

「そうね、お仲間の誰かが行くなら私も行ってもいいわ。でも私一人だけではないよ」

「ああ、そのパーティーなら僕も義理で行くことになっているんだ。それなら一

緒にゆこう」と森井が口をはさんだ。

ダンスのできない前野はぶぜんとして煙草をくゆらしている。遅くなると寮の夕食にありつけなくなる黒川は、この話に早く決着をつけたかった。

「じゃあこうしなさいな。男性は中山さんと森井さんで決まり。女性は青木さんからグループの人に都合を聞いて貰う事にしたら？」

あきらはめぐみ一人だけでも来てくれたら、森井には自分の妹の幸子をパートナーとしてあてがおうと内心思っていた。

「先日は大変御馳走様でした。あれからきつと飲んだのでしょうか？ あんまり羽目はずしてはいけませんよ。黒川さんも電車に間に合い、心配していた寮の夕食にもありつけましたって。さて、月曜日に学校で皆に二十一日のパーティーのことを話しましたら仰木さんは私が行くならばとのこと。久慈さんも行ってもよいような口ぶりでした。でもそんなに沢山券が手に入りまして？（勿論貴方が負担する必要はありませんけど）これはどうも妹さんにあげてしまった方が無難そうですね。とにかくそんな訳ですからよろしくご判断の上でおきめ下さい。

来週からはいよいよ教育実習に入ります。今までよりも二時間も早く起きなければならぬので頭痛の種です。人一倍神経が細かいものですから（？）さぞかしやせ細る思いをすること今からいささか憂鬱です。

ではお元気で、しっかり勉強するんですよ、食堂にばかり通っていないで！

中山 あきら様

めぐみ 六月十八日

これまでの彼女からの手紙には、文末にはちゃんと「青木めぐみ」と署名していたが、前々回の手紙からは「めぐみ」と名前だけで、名前は書かなくなったことにあきらは気が付かなかった。めぐみが意図的に名字を書かなくなったのは、どのような心境の変化なのか、物事の機微にうといあきらには知る由もなかった。ただ、あきらのほうも無意識に「中山あきら」とは書かず、「あきら様」で済ましていることも事実であった。

六月二十一日のダンスパーティーは超満員で、ヨット部の資金稼ぎは大成功だった。当時「鈴懸の道」で大人気のクラリネットの名手鈴木章治とリズムエース、それに「幸せはどこに」でヒットした大橋節夫とハニーアイランダーズの出演と

あって、ダンスは踊れないがバンド演奏を聞きたい人たちも会場のサンケイホールに押し掛けたのだった。この日集まったのはあきらとめぐみ、森井と仰木あさ子の四人だった。途中で会場の中で会ったら、パートナーを交換することにして四人は早速踊りの輪にとけ込んだ。ジルバなどを踊るスペースがなく、ただ向かい合ってもみ合っているだけであった。発散する若いエネルギーで会場は蒸し暑かった。誰もが額に汗して踊りかつ話をするそれだけで充分だった。

白いベルトをアクセントに、青いドレスをさりげなく着こなして、お洒落をしためぐみは、まぶしいくらいすてきだった。ただ顔を近付けてみるとめぐみの黒い眉毛のはしに、お白粉の小さな塊が拭いきれずに残っていた。あきらは踊りながら黙って指で眉毛を拭いてやった。めぐみは急にどうしたの？といった表情で小首をかしげてあきらの顔を見た。

「可愛い！」とあきは思った。

「こんな綺麗な人とダンスができるなんて俺もたいしたものだ」とあきは終始上機嫌であった。ただ、めぐみもたれ掛かった右肩がいつまでも痛かった。

あきは、はじめて蔵王で踊ったあとも右肩が痛かったことを思い出した。

めぐみは教職課程の単位取得のために教生の先生として六月半ばから一週間程下北沢の中学校に通うことになった。普段は悪態をたたく割には、本来生真面目なめぐみは懸命に授業の準備を知っていたが、あきは頃合を見てそれとなく誘ってみるのだった。

「拝啓、連日素晴らしい好天気が続き、夏休みを指折り数えて待っている今日この頃ですが、めぐみ先生はお元気ですか？ 勤務評定を気にしながら毎日奮闘なさっている事と思いますが、生徒の質問に答えられず立ち往生するなどという惨憺たる現実の問題はさて置いて、可愛らしいお弟子さん達を前にしてさっそうと教鞭をとる貴女の姿を想像するだけでも楽しみというものです。でも実際に教壇に立つのは来週からなんですよ？

さて、先日はお忙しいところヨット部のダンスパーティーに無理に誘ってしまい、あの芋の子を洗うような混雑の中で良く我慢して下さいました。なんて書いてらいいか分からないけれどとっても楽しかった！ 後になって友達から、お

前凄く楽しそうだったので、今度あの美人を紹介してくれと言われた位です。

本当に有り難うございました。

一週間も経ってからお礼状を書くのは少し変ですが、六月十六日期限のレポートをまだ書き終えてない程時間に追われていて(といっても、プロ野球を見に行ったりテニスをする暇があるんだから不思議ですけど) つい一日延ばしになつてしまいました。

僕達七月十日頃から南アルプスに行く予定です。ご一緒出来ないのが残念ですが(本当かな?) その間せいぜい勉強していて下さい。それから、もしよかったら七月五日頃帰りがけに新宿まで出てきませんか? 土曜日は英会話のレッスンがあるので三時頃には新宿にいるものですから。

なんだか変なお礼状になつてしまいましたが、どうぞお元気で暑さの折り日本脳炎にご注意ください。

青木 めぐみ先生

あきら拝

六月二十八日

「お礼状?をわざわざありがとうございます。本来ならばこちらから早速お出ししなければいけないかったのに全く恐縮してしまいます。あのパーティー私にとっても大変楽しい一刻でした。こちらこそありがとうございます。ダンスもう少し上手だといいますが、その点どうも気がひけます。

やっと一週間、怪しげな先生業が終わりました。初めの一週間は見学だと思つて安心していたのですが、一時間だけ授業参観してから、すぐ教壇へ立つてくれといわれてすっかり慌ててしまいました。

最初の時間は手がブルブル震えて出席簿がよくつけられないような始末でしたが、その中にだんだん余裕が出てきて、予定にない事までしゃべれるようになりました。

今でもその時のことを思い出すと全く冷や汗がでます。レッスンプランをたてるのに一、二時間はかかり授業について検討するのにどうしても一時間はかかりません。ただ教えるだけでなく、生徒達全てにいろいろな面で気を配らなくてはならないので、先生業というものは思ったよりずっと大変です。

でも生徒達は可愛く、やんちゃな生徒はそれなりに愛情が持てます。とにかく朝は六時半起床、七時には家を出て慣れない仕事に一日中気を遣いますので、毎日家に帰ってくると、口を開くのも嫌なほど疲れてしまいます。先生と呼ばれ

るのはどうも苦手です。生徒達から言われるのはもう少し慣れましたが、現役
の先生達に先生といわれるときぐくつとします。

今日は日曜日、久しぶりにお寝坊して、のんびりとラジオを聴いたり本を読ん
だりしています。サラリーマンの気持ちが変わるような気がします。

来週は（といっても今週ですがこれが着く頃は）音楽部の連中は鎌倉で合宿で
す。

今年是我々四年の部員は参加できそうもありませんが都合が出来次第、五日の
土曜日から六日にかけてだけでも参加しようと思っています。そんなわけで多
分五日は学校が済み次第すぐ鎌倉へ行く事になると思いますので、残念ながら
お会いできそうにありません。

でも貴方達がアルプスへ行く時はきつとお見送りさせて戴きたいと思ってい
ます。

時間がわかったら又知らせて下さい。差し入れは何をお持ちしましょうか？
毎日暑いですからくれぐれもお身体に気をつけて、暴飲暴食はいけませんよ。
あまり食堂に入りびたらないよう。

P S 日本脳炎にならぬようにとのご心配でしたが、そちらのほうはもう免疫
になっていきますのでご心配なく。

中山 あきら様

めぐみ

六月三十日

（続く）一五一五四字